

# 天地

ネットワークテーブル 532号

天地シニアネットワーク 2022. 6. 16

TENTI TO DAY <「田園の憂鬱」の碑><国立高専><消費者物価>			1
会員の広場			2
私 見	これからの 10 年間で起きそうな事	臺 一郎	2
歴史考察	徳川家康の外交顧問になったウィリアム・アダムス(三浦按針) なぜ、アダムスは家康に評価されたのか (2)	佐川 雄一	5
歴史考察	台湾の歴史を学ぶ(3)	田口 秀美	8
回 顧	国立慕情(14)「校歌」つづき	津田 孚人	10
事務局			13

\*\*\*\*\*

## TENTI TODAY

\*\*\*\*\*

横浜市青葉区在住の日比野さんからのメールです。

「国立慕情」に佐藤春夫の話が出てきますが、小生の近くの鉄町、市ヶ尾町には「田園の憂鬱」を書いたゆかりの地が数か所あります。仮住まい家跡、住宅用に購入したとされる土地 etc.中でも小説中に出てくる村でただ一人の女学生の生家に「田園の憂鬱」の碑が建てられ、横浜市青葉区の史跡の一つにされていました。しかしそれも最近子孫の都合で撤去され、春夫も忘れ去られるこの頃です。寂しい限りです。

2022. 5. 17

\*\*\*\*\*

朝日新聞朝刊・6月5日のTHE GLOBEに「国立高専(高等専門学校)」が紹介されていた。隠れた進学校として大変注目されているそうです。「凋落する日本」と、悲観ばかり聞かされる中であって、非常に頼もしく勇気づけられました。1962年に19校でスタート、現在は57校(国立51、公立3、私立3)に増え、在籍は5万人、毎年1万人位の入学者がいるそうです。

「高専では1年生からハードとソフトの両面のスキルが基礎からたたき込まれる。一方、高校から大学の工学部に進んだ学生が工学を本格的に学び始めるのが20歳前後。机を並べた時点で、エンジニア歴で大きく差がついている。」

中学卒業後の5年制で、卒業生の2割強が、技術科学大学(長岡、豊橋)のほか、有力国立大学などの主に3年生に編入、一方、専攻科(二年)に残って高度技術を学ぶ生徒が2割弱いる。技術立国の復活を目指す日本、その有力な担い手となりそうです。すでに経済界のトップにたつ卒業生もいるとのこと。世の中の注目度が低く、待遇面

で4大卒に差があったりするケースもあるそうです。隠れた日本の芽、期待をもって、応援しましょう。

\*\*\*\*\*

参議院の選挙が7月に行われますが、年金生活者にとっての一番の関心は、**消費者物価**。円安は、輸入品のコストアップにつながり消費者にとってマイナス要因。日本の実体経済が弱くなっているため、円安はさらに進むという識者もいます。株式の暴落があると踏んだり蹴ったり状態、心配がつのります。

\*\*\*\*\*

## 会 員 の 広 場

\*\*\*\*\*

### これからの 10 年間で起きそうな事

臺 一郎 (74歳)

コロナパンデミックがようやく下火になるのかなと思ったら、ロシアによるウクライナへの侵攻が始まった。こうした世界情勢を見るにつけ、もしかすると今後日本と世界はこれまで未経験の新たな変化が起きるのかなという気持ちになってくる。

そこで今後 10 年間以内に日本及びその周辺地域や、日本と関連のある主要国で起きそうな変化や事態を5つほど簡単に予測してみた。

### その1「日本国憲法の改正」

現在の日本国憲法は制定から既に 75 年という長い年月を経ている。驚くべきことにその間一字一句の修正もなされていない。結果、我が日本国憲法は今や世界最古の憲法になってしまったという。いくら何でもこれでは年々変化していく世界情勢とのズレや乖離が看過出来ないほど大きくなり、国防や外交や国家統治の面でも様々な無理と矛盾が発生して、国益を損じ兼ねない状況となっている。

多くの国民がそのように感じ始めている所に、コロナパンデミックによる国民私権の制限問題や我が国の安全保障にも影響のある“ロシアによるウクライナへの軍事侵攻”が勃発。いよいよ憲法改正は待ったなしの状況となった。今や左派系野党でさえも、与党の改憲案について反対とは言えても憲法改正そのものに反対とは言えなくなった。よって 10 年どころか今後 5 年以内に日本国憲法は改正されるだろう。

護憲派は憲法改正が避けられない情勢となれば、再改正のハードルを下げるために、憲法改正の手続きを定める 95 条及び 96 条の条文内容に拘るかも知れない。そして我が国が憲法改正を実現した時、国際社会における我が国のイメージや認識は間違いなく大きく変わるだろう。

## その2「国防費の対 GDP 比 2%の実現」

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を受けて、去る6月4日ドイツ連邦議会は国防費の対 GDP 比を NATO 加盟国の目標水準である2%超えとする憲法改正案を可決した。ちなみに過去20年間のドイツにおける国防費は GDP の 1.1%から 1.4%水準で推移してきたから、額で言えばほぼ2倍近い増加となる。

こうした状況から我が国に於いても、防衛費を現行の GDP 比1%以内から5年程度をかけてドイツと同様の GDP 比2%水準へと上げるべしとの意見が自民党から上がり始めている。今や国防費を GDP 比で2%相当とすることは西側主要国のデファクトスタンダードとなりつつあることや、中国の急激な軍備増強及び北朝鮮による相次ぐミサイル実験など我が国を取り巻く安全保障環境が年々厳しさを増す中では「やむを得ない」との国民意識が醸成されつつあるように思う。

よって今後の5年間で GDP 比2%に増強するという自民党案は実現するだろう。さらにも今後中国による台湾への軍事侵攻などが発生すれば、我が国の防衛費は一時的に GDP 比で4%とか5%に跳ね上がることもすらあるのかもしれない。

## その3「国際社会における米国の影響力や存在感の消失」

日本国内の新聞記事やテレビニュースだけを見ているとわからないが、最近の米国社会は国の政策、自由と私権制限の兼ね合い、価値感や倫理観等に関する路線の対立等が先鋭化して、分断が深刻になっているようだ。更にこのままでは内乱や騒乱、果ては内戦にまで発展するとの悲観的な見方まで出ている。もし2024年の大統領選挙でトランプが再選されるような事になれば、米国各地で内乱や騒乱が起きるかも知れない。

分断の軸となっているのは、感染症のワクチンの接種義務化に関する賛否の対立、主にメキシコからの移民の受け入れについての賛否の対立、米国産シェールオイル等の増産や海外輸出などエネルギー政策に関する賛否の対立、インフレ進行による物価上昇に対するバイデンの経済政策に関する賛否の対立、中絶の禁止政策に関する賛否の対立などのようだ。

こうした米国社会の対立と分断は、それが更に進めば、いずれは軍隊や警察などの組織内での対立へと発展する可能性もある。そうなれば米国は最早他国の問題に干渉しているゆとりはなくなり、国際社会における影響力や存在感も大きく失われるだろう。そんな米国の状況を見た中国は、チャンスとばかりに台湾や周辺国への軍事侵攻に踏み切るかもしれない。日本国憲法の改正や防衛費の GDP 比 2%の達成は、こうした米国社会の今後の動向見通しも踏まえて判断・決断する必要がある。

#### その4「中国による台湾への軍事侵攻の実行」

2月24日ロシアがウクライナへの軍事侵攻に踏み切った。それにより、中国による台湾への軍事侵攻の可能性に対する関心が日本国内でもにわかに高まってきた。中国による台湾への軍事侵攻を抑止する最大の要素は、米軍の参戦可能性や関与の見通し次第だろう。米軍が中国軍との直接的な軍事対決をも辞せずという姿勢なら、中国は台湾への軍事侵攻を躊躇もしくは断念するだろう。逆に前述したように、米国社会の分断や対立が深刻化して米軍の海外派遣は到底無理となれば、躊躇なく台湾への軍事侵攻に踏み切るのではないだろうか。

現実はその中間になりそうなので、中台戦争勃発の見通しは不確実である。但し、いずれにせよ中国は台湾のみならず日本や米国に対してもこの1~2年のうちにハイブリッド戦を仕掛けてくる可能性がある。すなわちサイバー攻撃による相手国のインフラ麻痺や機能破壊、SNSによる偽情報やプロパガンダ情報による世論混乱や社会分断化、相手軍のメールに偽情報を送りつけることによる指揮命令系統の混乱化などだ。

与那国島など日本国の領土は台湾と隣接している。故に台中の武力衝突は嫌でも我が国を戦争に巻き込む。そうであるならば、憲法改正や防衛力の増強、サイバー攻撃への対処など早速に着手すべきではないだろうか。

#### その5「ロシアの分裂と崩壊」

Youtubeで筑波大学の中村逸郎名誉教授は、今後プーチンが病気やクーデターで失脚したならば、ロシアは崩壊して3つ位に分裂するだろうと予測している。すなわち、ウラル山脈から西はモスクワを中心とするモスクワ公国となり、ウラル山脈から東のバイカル湖まではイスラム教国家の連合体になると。そしてバイカル湖から東はシベリア、沿海州、サハリン、千島列島(北方四島を含む)、そしてカムチャッカまでを含めて中国の領土になるという見方だ。

中国は、天然ガスなどのエネルギー資源が豊富な沿海州やサハリンなどが欲しくてしょうがない。よってロシアが崩壊したなら、バイカル湖から東の領土を買い叩くか、さもなくば一気に軍事侵攻して中国領土にしてしまうという予測だ。既にサハリンから択捉経由で国後島までの海底ケーブルは、中国のHuaweiが敷設しているというから中国の領土的な野心は本物かも知れない。我が国にとっては、弱体化したロシア国の領土でいた方がまだしも北方領土返還の可能性はあるのかもしれない。

以上の他にも、中国における内乱やウイグル、チベット、内モンゴルなどの独立の可能性なども今後20年間の予測ならあるかもしれない。また日本国内の事柄に限れば、まとまった移民受け入れに踏み切るとか、首都圏直下や南海トラフなどの大地震の発生も早ければ今後10年以内に起きる可能性がある。特に南海トラフ地震では関

東から関西、四国の太平洋沿岸地域において局所的には波高 30m といった巨大な津波が発生する可能性が指摘されており、その被害は東日本大震災をも上回りそうだ。激甚災害時の私権制限という面や自衛隊の対応力の強化という面からも憲法の改正や自衛隊の増強は必要だと思う。

さて、以上の予測はほぼ筆者個人の思い込みに近いもので、関連情報やデータの緻密な分析によるものではないことを念のために記しておく。

\*\*\*\*\*

## 徳川家康の外交顧問になった ウィリアム・アダムス(三浦按針)

なぜ、アダムスは家康に評価されたのか

佐川 雄一 (84歳)

### 第2回

#### 1-3) リーフデ号の豊後漂着、その後、家康の要請を受けて大阪に向かうアダムス

1600年4月12日、豊後の臼杵に漂着したアダムス一行は憔悴しきっていたが、地元で食料・水、宿泊所を与えられ、生気を取り戻すことができた。

オランダ船;リーフデ号の豊後漂着は、地元の臼杵城主;太田一吉が知るところとなり、配下の検使たちを漂着船に派遣、乗組員、国籍、渡航目的、積荷について調べさせた。太田一吉は、これらをまとめ、長崎奉行;寺沢広高に報告した。

間もなく、臼杵に在住するポルトガル人宣教師も通訳とともに現れ、乗組員は宣教師から訊問を受けた。乗組員が新教徒のオランダ人と英国人であるを知ったポルトガル人宣教師は自分たちのライバルになると確信、『漂着した乗組員は海賊である、直ちに処刑するか国外退去にすべし』と藩主に迫った。

藩主:太田一吉は、渡航が交易目的とは言え、毛織物を除くと積荷の大半が重火器(青銅製大口径大砲19門、小口径大砲8門、鉄製砲弾5千発、火薬50樽など)で占められる事実を前にして、単独での判断を控え、長崎の藩主寺沢広高に相談の上、当時、5大名の内、最強と自他ともに認知される徳川家康(大阪城)のもとに伝えることになった。

暫くすると大阪城に居を構える徳川家康から、リーフデ号船長を大阪に連行するよう指示が届く。クアッケルナック船長の健康が未だ回復していないため、航海士アダムスが代わりに大阪に行くことになり、オランダの商人(乗組員の一人):ヤン ヨーステンを同伴した。豊後から13日ほどかけて堺に着くと船から降りたアダムス一行は馬で大阪城に向かった。

#### 1-4) 家康との大阪城での謁見

アダムスとヨーステンの二人は豊後に漂着してから1ヵ月後の1600年5月12日、家康の前に連れていかれた。この時、家康は、近い将来、日本国の統治が自らの手に委ねられると思いついて、『日本を取り巻くアジアの情勢、ポルトガル・スペインを含めた欧州列強の動き、旧教・新教の違い、国家に置ける宗教の位置づけ、海外交易を拡大する方法、アダムスが辿ったオランダから日本までの航路、さらにリーフデ号に積載された商品・武器弾薬、等』について、尋問は延々と深夜まで続いた。政務に多忙であった家康が西洋からの船乗りの尋問にこれだけの時間を費やしたことは、この謎のイギリス人とオランダ人が家康にとってどれだけ興味深い存在だったのかを窺がわせる。

リーフデ号の豊後漂着、地元の臼杵城主・長崎奉行による家康への報告、家康が密使を豊後に派遣、船長の大坂への連行、家康による事情聴取、これらの一連の行為が僅か1か月で行われたことは、リーフデ号漂着の知らせが家康にとっていかに重大な意味を持っていたか理解できる。

二日後、アダムスとヨーステンは再び家康から呼び出され同じ質問を受けた。これはアダムス等の発言の信憑性を確かめるためであった。日本人をカトリック教徒に改宗させようとするポルトガル人の宗教的示威行為がアダムスには見られず、宗教とは何か問われると、『宗教は宇宙と大地に感謝する奉仕の手段であり、宗教を信じるか信じないかは個人の判断に委ねられる』と答えるアダムスの態度に家康は親近感を覚え、『リーフデ号乗組員は海賊である、依って全員処刑すべし』とするポルトガル人宣教師の提訴には同意しなかった。かくして、アダムス一行は処刑を免れた。

尚、アダムスとの会談で家康の関心を引いたのは、積載物の大砲、小銃、火薬、弾薬であった。そのため、家康は、豊後に停泊していたリーフデ号と他乗組員を積載物とともに豊後から堺に移動させた。このお陰で、大阪で家康から尋問を受けていたアダムスは他乗組員と堺で再会、お互いの無事を確認、喜びを分かち合うことができた。その後、重火器を積載したリーフデ号は堺から浦賀(家康の領地)に回送され、ここで荷下ろしされ、大砲の一部は江戸に運び、江戸城近くで家康から試射を命じられ、アダムスが、数学・幾何の知識を応用して試射すると高い角度で目標物に命中、家康を驚嘆させた。

同じ年の8月、予期された通り豊臣秀吉の臣下であった石田三成が不穏な動きを見せ、家康との間で“関ヶ原の合戦”が起こるが、この時、リーフデ号に積載されていた大砲が使われたとの話がある。但し、アダムスが残した記録には記載がないので事実確認ができる状態にはない。また、関ヶ原の戦いにアダムスが参加したか否かについても不明である。関ヶ原の戦い(1600年9月)で石田三成を破り、天下人に

なりつつあった家康は、西洋・アジアの現状を的確に把握すべく、外国要人との会談には多くの時間を惜しみなく割いていた。

そしてこのころ、英国・オランダでは、対外貿易の運営・管理で大きな変化が起こっていた。アジア貿易から最大源の利益を確保するために英国政府は英国東インド会社（1600年）、オランダはオランダ東インド会社（同1602年）を設立、これらの会社に貿易独占権を与えたのである。

この時点でオランダ東インド会社の最大関心事はモルッカ諸島の胡椒・香辛料と中国産生糸の取引であったので日本に船団をタイムリーに派遣する余裕がなかった。このため、オランダ船の日本寄港は、アダムスの豊後漂着から9年後の1609年と遅れた。

この当時の商船は、航行中敵国（ポルトガル・スペイン）の軍艦に遭遇すれば自己防衛をしなければならなかった。そのため、商船も戦闘に備えて設計されており、大砲を装備するのが一般的であった。豊後に漂着したリーフデ号の重装備はこのような国際情勢を反映していたのである。

そして日本も歴史の転換期にあった。国内外の情勢判断に長け、非情・寛容さを併せ持つ徳川家康が新たな時代の幕開けを思考していたのである。家康がアダムスに遭う機会を逸していたら、家康の統治スタイルはどのようになっていたのか、興味は尽きないが、2人の出会いは家康の統治に少なからぬ影響を与えた。

## 2. アダムスがなぜ 家康に評価されたのか

### ここでは4点指摘したい

- ① アダムスとの度重なる会談を経て、家康は、それまで抱いていたポルトガル・スペインを中核とする西洋列強観に、オランダ・英国が加わり、その2国ともカトリック教でなくプロテスタント教を信仰、さらにこれらの国々がポルトガル・スペインと戦争状態（国内と海外市場）にある現実を認識した。アダムスの俯瞰的な西洋列強の分析と日本政府が採るべき対応策についての具体的な指南は家康の対外政策立案に時機を得たものであった。
- ② 日本をキリスト教国に転換し、対外貿易の独占を企てるポルトガル・スペインの帝国主義的な野望に対し、アダムスが思考する双方 win-win な形での交易・布教活動は、家康にとって好ましく納得のいくものであった。
- ③ アダムスはライムハウスでの12年間の徒弟修養期間、スペイン無敵艦隊との戦い、バーバリー商会での10年、リーフデ号に乗船2年に及ぶ大西洋・マゼラン海峡・太平洋の航海、これら20年余の現場生活で学んだ科学・技術・危機管理・未知への挑戦はアダムスの貴重な財産になっていたが、アダムスのこのような幅広

い知識と経験、そして言動の一貫性が家康を魅惑し、家康にとってアダムスは英国人の友人というだけでなく、頼り甲斐のある相談役になっていった。

- ④ 「郷に入れば郷に従え」、アダムスは日本の慣習に素早く慣れ、家康の通訳として日本人とヨーロッパ人の仲介役を果たすなど、日本語の習得にも努めた。後年、オランダ・英国が平戸に商務館を開設すると、多くの日本人が採用されたが問題もしばしば起こった。オランダ人・英国人と日本人の間に挟まれたアダムスは仲裁役を頼まれるのが常だったが、アダムスは原則、日本人の声・考えに組し、オランダ・英国人の不興を買った。海外で生活する以上、現地人の立場に立った思考力を持たずして共存はできないとアダムスは確信していた。このようなアダムスの生き様に家康は心打たれたものとする。

(つづく)

\*\*\*\*\*

### 「台湾の歴史を学ぶ」(3)

田口秀美 (72歳)

(『八王子市南大沢 歴史の会』所属)

#### ③ 清朝時代 (1)

清国は台湾の領有を始めるにあたり、官吏や軍人が土着化して、台湾の住民と結託し反乱を起こすことを警戒し、任期を3年にして家族を伴うことを禁じました。また、「封山令」を発令、先住民が暮らす地域と移住民が暮らす地域に境界線を設置して交流を禁じました。やはり、先住民と移住民が結託して反乱を起こすことを警戒した政策です。

更に、大陸から台湾への渡航を制限しました。しかし、「渡航制限令」や「封山令」を発令して鉄製品の移入を禁止するなど厳罰を伴う多くの禁令が発令されましたが、取り締まる役人の腐敗によって形骸化、なしくずしになりました。新天地を目指して、多くの開拓者が海を渡りました。大陸から約200kmの台湾海峡は海流が早く、特に澎湖諸島近くの「黒水溝」(深く危険な海流)は多くの船、開拓者をのみ込みました。しかし台湾の人口は増加、中央山脈の東側まで開発が進み、1809年には東北部の宜蘭庁が設立されるほど開発が進みました。

清国領有の212年間に「五年大乱三年小乱」が発生したと記録されているように、大小、約100件の武力蜂起、騒乱事件の歴史が残ります。官吏への不満が、主な原因と言われています。官吏の給与が低く、汚職、賄賂の常態化が住民を苦しめました。

騒乱事件の中で、1721年の「朱一貴の役」、1786年の「林爽文の役」、1862年の「戴潮春の役」が、清国統治時代の台湾の三大反乱と言われています。1721年の朱一貴の役は、7日間にわたって台湾の全域に広がり、明王朝の再興を掲げ、

国名を「大明」、年号を「永和」と定めて各地で闘いました。1786年の林爽文の役は、明王朝の復興を掲げて年号を「順天」と定め、1年あまり続けました。1862年の載湖春の役は、台湾の中部を中心に3年近くの騒乱に及びました。

鄭氏政権の崩壊の後、秘密結社「天地会」が結成されました。異民族の満州族・清王朝を打倒すること、漢民族の明王朝の再興を目指し、互助を目的とする結社でした。「天地会」の名称は、「天地を父母として、同盟員は兄弟とする。」ところに由来しています。入会は、互いの血を盃で交わす儀式により会員になることが認められました。親兄弟の契りを結び家族的な団結を強めて清国に対抗、社会的、経済的に助け合いました。騒乱事件の背景に「天地会」の存在があると言われる。

清国時代の子供の教育は「書院」と言われる寺子屋で教育され、先住民の子供の教育は、1695年に学校教育を始め、教材には「三字経」を使用しているとされています。

清朝領有の時代も台湾は豊かな穀倉地帯で、米は年2回から3回収穫されました。福建省などに米や砂糖などが移出され、大陸からは日用品などが移入されました。その活発な商業活動から、移出入に携わる商人の「郊商」という商業ギルドが形成されました。1720年頃には厦門から南を商権とする「南郊」と、厦門から北を商権とする「北郊」、港を商権とする「港郊」が形成され、台湾の商業資本家として発展しました。

19世紀中ごろ、帝国主義列強諸国の東洋進出の影響が台湾にも押し寄せてきます。アヘン戦争のさなか1841年9月、イギリス艦隊が台湾の沖に姿を現し、基隆港を占領しようとしたが清国軍が反撃して押しとどめました。

1854年7月には、日本の江戸徳川幕府と和親条約を終えたアメリカのペリー提督艦隊が、基隆港に10日間停泊、失踪した水兵を捜索すると言って炭鉱の調査をしました。アメリカに帰ったペリー提督は、台湾はアメリカの極東貿易の拠点に適しているとして、占領を提言しました。アメリカ政府は調査を始めましたが、アメリカ大統領が第13代、ミラード・フィルモアから、第14代のフランクリン・ピアースに代わり、アメリカが台湾に進出してくる政策は無くなりました。

1856年10月に、広州で「第二次アヘン戦争」と言われる「アロー号事件」が発生しました。アロー号を、アヘンを積んでいる疑いで臨検した清国官憲が、イギリス人の船長と清国人の船員を逮捕した事件です。当時は、フランス人の宣

教師が殺害される事件が発生しフランスとの関係も陰悪な状態で、フランスとイギリスの連合軍と清国の戦争になりました。

武力優勢なイギリスとフランス連合軍が、清国軍を圧倒して破り「天津条約」が締結されました。この条約によって台湾の「淡水港」、「安平港」、「打狗港（現在の高尾港）」が開港され、各国の「洋行」（現在の商社）や、宣教師が続々と入ってきました。フィリピンのカソリック教会、サン・ドミニコ会も神父を派遣して布教を始め、プロテスタント教会の、イギリス長老派教会、カナダ長老派教会も宣教師を派遣し教会を設立して布教を始めました。

台湾の基督教の信者の数は、古くから台湾に伝わる仏教、道教の信徒の数に比べて数少ないものの、台湾の社会と文化に影響を及ぼしています。

（つづく）

\*\*\*\*\*

#### 国立慕情(14)

津田孚人(84歳)

前回につづき、桐朋中・高の「校歌」について。

実際のところ、佐藤春夫作詞の「校歌」が、現在も歌われているのか大いに気になる。非常に格調の高い、素晴らしい校歌なので、現在も続けて歌われているものと確信してはいますが……。さらに、桐朋とは直接関係のない佐藤春夫が、何故「校歌」を作詞したのか、を知ったうえで、歌っていると嬉しいのですが……。

平成31年(2019年)3月、故人が97歳で他界されたとき、葬儀で出会った5年後輩の元校長の口からは、故人の話が一切出なかった。故人とは20歳もの年齢差があり、詳しい話を知らなくても無理もないところ。そこで、故水沢竜夫師が、2016年10月に発行された「桐朋学園・男子部門 創立75周年記念誌」に『往時茫茫』という文章を寄稿し、この間の事情をいろいろ説明しているので、紹介したい。

「旧職員、渡邊弘一郎先生の『桐朋』校歌物語の文中に、「佐藤春夫なら、うちの兄貴の持家に借家しているから……」と自分が語っているのをみてびっくり仰天、心臓が止まる思いをした。その後、修正を何度もお願いしたが、渡邊先生は、文末に「どなたか修正してください」と、そのままになっている」

「佐藤春夫なら、うちの兄貴の持家に借家していた」というのは、前号の北海タイムスの佐藤春夫の言にあるように完全な間違い。これにつきその後、修正されたとも思えないので、桐朋人は、桐朋の「校歌」は、「佐藤春夫が水沢家に間借りしていた関係で、作詞をお願いすることが出来た」と、思っているに違いない。

故人は天界で嘆いておられることと思われる。故人の嘆きを少しでも減ずることが出来ればと思い『往時茫茫』を紹介します。

## 『往時茫茫』より

昭和18年3月、札幌師範を卒業し、4月に東京高師に入学した。10月、学徒出陣あるも、高師生はなお徴兵延期の命があり、見送る側の席につく。4才上の兄がすでに高師の学生で、佐藤春夫家に家庭教師として出入りしていた。高師付属小学校に通う一子方哉君のためであった。

兄の後を引き継いだが、昭和19年半ば、戦争末期の緊急事態で軍需工場に派遣され、工員寮に缶詰め状態で鋼索の生産に専念することになった。佐藤家も空襲を避けて、信州佐久に疎開、交流空白の期間が数年続いた。

戦後の混乱期、大學は出たものの身分が決まらない状態のとき、佐藤家に参上した。千代夫人の助言をいただいて、付属小学校から高師に関係のある新しい学校に移られていた熊井先生を訪問することにした。大塚の高台、一面の焼け跡に建てられた仮のお住まいを初めて訪問した。快く引見され、山水から桐朋への移管のあらましを語られた。

後日、採用決定の知らせがあり、昭和24年6月、初出勤、教員人生の出発点を迎えた。月曜日、校庭で朝礼があり、紹介された。広々とした校庭、うっそうと茂る林、素朴な木造の陸軍の兵舎に似た校舎、そんな印象をもった。

着任二年目が、創立10周年だった。山水7年、桐朋3年通してである。私は、中二の担任として、記念行事に加わった。山下太郎氏(※)の感動的な講演、記念植樹、音楽会、研究発表会等、総じて父兄の積極的な参加がたのもしく感じられた。(※桐朋の前身、山水の創始者、戦時の海運で財をなす)

「校歌」は、熊井校長が直接依頼したのを、私が使い走りをした。手許の40周年記念誌によると「昭和25年1月12日、校歌作詞者、佐藤春夫来校、講演」とある。三多摩唯一の木造の大講堂で、全校千人を越える生徒を前に話された。生徒がざわざわして気が気でなかった。

この日、私は案内役を仰せつかり、関口町のお宅に参上した。佐藤先生は、和服にインパネスを重ねた重々しいで立ちであった。目白坂を下り江戸川橋から都電、飯田橋から中央線で国立に向かった。混んでいて席がない。勇を鼓して車掌にお願いしたら、進駐軍専用車両に誘導してくれ、並んで座ることが出来た。今ならハイヤーだが、当時は戦中の困苦欠乏に耐える根性が残っていた。

以上から、「佐藤春夫は、水沢家の借家人ではない」「佐藤春夫の奥様の助言で、熊井校長に会い、桐朋の教諭に採用された」「校歌は、熊井校長が直接依頼、わたしは

使い走りをしてだけである」そして、「昭和25年1月、校歌作詞者、佐藤春夫が講演のために来校したときに、自宅まで迎えに行き、案内した」ということが明らかになった。

故水沢竜夫師にとっては、学校から依頼されて、個人的な関係にあった佐藤春夫に校歌の作詞を頼み、素晴らしい「校歌」が出来て周囲から大いに感謝されたに違いない。とは言え、校歌制定は1950年2月、水沢師が桐朋に奉職したのが1949年6月で1年も経たず、さらに作詞者・佐藤春夫が来校して講演をしたのが1950年1月(以上、桐朋75年記念誌による)となると7カ月ともっと短くなる、という事実を重ねると、奉職して半年ほどの新参者が点数を稼いだ、と周りから見られたに違はなく、師の性格からすると、きっと、経緯は語らず、ただ戸惑われるだけだったに違いない。

故人は、着任2年目、中一の担任を任されるが、序列が後ろから2番目であることが分かる。5クラスあったが、担任は、採用順に並んでいる。参考までに、5クラスの担任名と、奉職年を以下に記しておきます。

Aクラス・真鍋道麿・理科・1943年、Bクラス・北村泰三・理科・1946年、Cクラス・高島常安・数学・1949年4月、Dクラス・水沢竜夫・国語・1949年6月、Eクラス・西尾栄一・英語・1950年、

ところで、「校歌」の制定時については、前々から若干気になっていた。中学1年時、担任ではないが国語担当だった水沢師が、学年の中で作文が上手な生徒に、国立のこと、あるいは学校のことなどについて、作文を書かせたことがあった。作文は、そのあと佐藤春夫のもとに届けられ、校歌はそれから作られたと聞いた記憶が残っていた。簡単に言えば、佐藤春夫は、国立を訪ねることなく桐朋の「校歌」を作詞した、とずっと思っていたのである。

さらに、「校歌」の一番の出だしにある「国立の丘にして」にある「丘」だが、国立の中心部、その周辺には「丘」はなく、また地元国立にある小学校、そして都立国立、五商、国立音大付属、等々、どこの学校の校歌にも、「丘」なる言葉は使われていないので、ますます佐藤春夫は、国立に来ることなしに「校歌」の作詞をしたと、いう思いを強くしていたのである。

一方、『往時茫茫』では、「手許の40周年記念誌によると「昭和25年1月12日、校歌作詞者、佐藤春夫来校、講演・・・とある」と水沢師は書いている。小生たちが入学する1年前に、来校したようなのである。しかし、前述のように、そもそも半年ほど前に職員となった水沢師が、学校から頼まれて、佐藤春夫に作詞を依頼したというのはかなり不自然であり、中学1年の担任となった(昭和25年4月)あとに、生徒に作文を書かせ、佐藤春夫のもとに届けたという話には無理がないのである。

察すれば、「校歌」は、1950年(昭和25年)2月に制定されたのは水沢師の勘違いで、実際は1951年(昭和26年)2月だった。また佐藤春夫の講演会も、昭和26年1月だった。創立75年記念誌にある校歌制定、昭和25年2月、という記録は、水沢師の話を鵜呑みにした結果のような気がする。

このことをはっきりさせるには、中学の入学式(昭和25年4月)で「校歌」が歌われたか、歌われなかったかを思い出すことだが、70年以上前のことなので難しい。水沢先生ご存命中に確かめておけばよかったと反省しきりの日々となっている。

最後に創立75周年記念誌の『往時茫茫』のページにあるクラスの集合写真、水沢先生のクラスではなく、高島先生のクラスのもの。故水沢竜夫先生は、自己主張をあまりしない方でしたので、クレームをつけなかったのかもしれない。とはいっても記念誌として残るだけに、故人に代わりぜひお願いしたい。

\*\*\*\*\*

## 事 務 局

\*\*\*\*\*

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス : [tentisenior06@gmail.com](mailto:tentisenior06@gmail.com)

電 話・FAX 03-3819-7651